

平成18年(2006)4月28日(金)

第38回 市村学術賞受賞者 代表挨拶

ご紹介いただきました東京大学、生産技術研究所の岡部徹でございます。
受賞者を代表いたしまして、一言お礼の言葉を述べさせていただきます。

私のように、工学分野、とくに生産技術の研究を行う者にとっては当然のことですが、今回受賞対象となった研究は、私一人でできるのではなく、諸先輩や同僚、友人、研究室の学生やスタッフ、さらには家族の多大な協力と支援があって、はじめて成り立つものです。この場をお借りしまして、関係者の皆様に、先ずお礼の言葉を述べさせていただきます。

この度、私は「プリフォーム還元法による電子材料用レアメタル粉末の製造技術の開発」という研究成果に対して栄えある市村学術賞をいただくことができました。この研究は今から5年前に、本日もご列席いただいております東京大学生産技術研究所の前田正史所長に呼ばれ、東北大から助教授として赴任し、独立した研究室を新たに立ち上げていた最初の年に独自に考案し、鋭意、研究を進めてきた課題です。研究の内容につきましては、先ほど尾上先生からご説明があり過分のご高評をいただいておりますので、ここでは研究の経緯について少しご紹介させていただきます。

本研究の根幹となった発明は、私が自宅でパスタをゆでていたときに偶然、思いつきました。(料理をする人にとっては常識だそうですが、)スパゲッティなどのパスタというのは、非常に優れた“構造体”でして、均一な熱処理に適しております。パスタの原料は、もともとは、引っ付きやすく扱いが難しい“粉の練り物”であるのに、反応容器である鍋には、全くひっつかず、均一な熱処理が効率良くできるといった優れた構造をしております。さらに、「1本茹でるのも1万本茹でるのも、同じ7分である」ということを、私自身が、新たに知った時は感動しました。それから暫くの間は、私は研究室で大学院生と一緒にニオブやタンタルなどのレアメタル酸化物の粉をこねて、「レアメタルのパスタ」を作り続けておりました。苦労の末、パスタ法が完成し、上手く実験が行って均一なレアメタル粉末が出来た時には、家内にも「凄い発明をした」と自慢げに説明しましたが、「そんなことは、主婦なら誰でも知っている。あなたの発明はその程度のものか」と返答されて苦笑した思い出があります。

本日、このようなお話をしましたのは、最先端の研究でも、研究の根幹となるアイデアは、意外にも「身近なところに転がっており」、「発想が大切」ことをご紹介したかったためです。これまで私は、京都大学 アメリカのMIT 東北大学 東大と研究機関を転々としながらも、何処に行っても執念深く、レアメタルの生産技術に関する基礎的な研究を続けております。学術研究には、ある程度の執着心と新しい発想を重んじる遊び心が必要なのかも知れません。

本日ご台臨の寛仁親王殿下より暖かい励ましの言葉を賜りました。本日いただきましたこの栄えある学術賞は、新しい発想とアイデアの実現に向け、今後とも努力を惜みず研究を続けるようにという、力強い応援を戴いたものと存じます。

この度の受賞の趣旨を良く理解し、この栄誉を糧に、今後とも独創的な研究に全力を尽くす所存でございます。ご臨席の皆様をはじめ、関係者各位におかれましては、今後とも、ご指導、ご鞭撻をいただきたく、よろしく申し上げます。

これをもちまして、私のお礼の挨拶とさせていただきます。どうもありがとうございました。